

ありふれた錬成師と最期のマスターは世界最強

見た目は子供、素顔は厨二

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは英霊を束ねた一人の少年と奈落から生まれた一人の怪物が出会ったらというIFのお話。

何者かの詠唱により異世界トータスへと飛ばされた藤丸立香。

そしてその先で出会った【神の使徒】の【無能】、南雲ハジメ。

この出会いが最強への道の始まりとなる。

※この作品は「ありふれた錬成師は最期のマスターと共に」の改訂版です。

※この作品を書くにおいてキャラの崩壊はお許してください。

※多少設定が違ったり、展開を無理矢理詰ってますがこれもまたお許してください。

※基本的には『ありふれた職業で世界最強』に着色を加えた感じですが、恐らく原作を見ていただいた方が楽しめます。

※ハジメメインヒロインはユエと香織、立香メインヒロインはマシユです。多分ハーレムになるかと思われれます。

※大体作者の都合により両作品の設定を入れたり入れなかったりします。ご注意ください。

※FGOの時間系列は2部5・5章終了からです。そこからは完全に分離しているものとお考えください。

※これらがオールオツケーという方、お先にお進みください。

## 目次

序章 偽神栄光世界・トータス 副題	〈邂逅〉	
第零節①、オープニング of カルデア	――	1
第零節②、オープニング of トータス	――	8
第一節、異なるモノ	――	17

序章 偽神栄光世界・トータス 副題 邂逅

第零節①、オーブニング of カルデア

『私』はもう当に死んでいる。力を奪われ、命を失った。されどこの遺志を次の誰かへ届けて欲しい。そんな願望の成れの果て、守護者たる『私』はただただ歌う。

アレはじきに奴と接触する。それを避けるにはもう遅い。この時点で本来の世界線の未来は途絶えてしまった。【魔王】だけではもうこの世界の悪雲を晴らせない。

故にこの世界に在るべき残滓は『私』を召喚した。本来ならば英霊としての力を持たぬが、こういった絶望に対しては一番最適な英霊が『私』だったから。

『私』は紡ぐ者。繋げる者。次世代へと可能性を授ける者。だからどうか救って欲しい。『私』が恨み、哀しみ、されど愛したこの世界を

貴方に届いて。己の世界を救った非力なる君よ。平凡にして非凡たる君よ。

地球最期のマスター、藤丸立香よー

~~~~~

「ーーンンッ!! これはこれはマスター! 愛しき我が主よ! どうされたのです? それほど慌てたご様子で:もしや奥方の誰かが修羅場をば!?! それならば何とも唆られるものですかあ!!」

ーコイツ、死ぬほどめんどくせえ

カルデア最期のマスター、藤丸立香は目の前のクソ陰陽術師を半目で見ながらそう思った。

目の前にいるのは元敵であるアルターエゴ、蘆屋道満。平安京での特異点で血を血で洗う戦いを見せたが、その末に撃破。今現在はカル

デアに靈基登録された味方である、一応。

異性の神とはもう切れている様ではあるが、それはそうとしてイマイチ信用出来ないのがこの男だ。もつともその陰陽術の腕はかなりのもので、頼らざるを得ない時もしばしば存在する。ただ亜種特異点やインド、平安京での外道ぶりを思い出すとどうもわだかまりを払拭しきれないのだ。

「おやおや我が主、マスターよ！ さては未だにこの拙僧を恨んでいる御様子ですねえ！ …ですがこの前の『報いを受けよ！ 掎角一陣乱発の巻！』で拙僧を散々矢としたことは覚えていらつしやいますよね？」

「…何のことかな？」

「…またやる気ですか？」

道満の問い詰めに立香は目を逸らした。逃さぬと道満が立香の顔の方に回り込む。逃げる。回り込む。逃げる。回り込む。フエイント。引っ掛かる。…

「いや、そろそろ邪魔だから退いてよドーマン」

「ですから拙僧の事は道満と…いえそもそもこの先に何の御用ですか？ 歩いてでも良いですぞ？ とか拙僧、話をお聞かせ願います」  
「んー、まあ話すぐらいだったいいか。実は夢を見てね…それがいつもみたいに変な夢だったから先にカルデアのみんなに教えておこうかなって」

「夢、ですか…。確かに平安時代でも悪霊、生霊、呪い…夢はそれらを判断する要素の一つ。ンン！ どうやら貴方にもその様な経験が有りのご様子で！」

「うん、しょっちゅうあるからね。むしろただの夢の方が最近になつては珍しい様な…」

「フハハ！ 流石ですぞ、我が主!! 最期のマスターともなれば夢だろうと駆り出されるとは！」

「笑い事じゃないよ。お陰でこっちは毎度毎度眠りが浅いんだから」

「良いではありませんか！ 常人ならば一生に一度見られれば運が良いものを、飽きる程に経験できるのですぞ？ 寧ろ得と考えれば宜し

いかと」

相もかわらず何を考えているのか。立香にはこの男の言の葉はどれこそが戯言であるのかが検討が付かない。或いは清姫が居れば嘘をついた途端焼き払ってくれるので楽だろう。しかし道満との会話は必然的に腹の探り合いとなり必然的に立香も嘘をつくので、諸共に焼かれること間違い無しだ。それは立香も願ひ下げである。

そうして歩いているとローはお道満は途中で段蔵と小太郎が連れて行ったローある一室が目に見えてきた。その部屋はカルデアに所属する者ならば一度は入る一室、『ダ・ヴィンチちゃん工房』である。

ドアは立香の姿を認知し、横にスライドされる。するとその先に現れるのは四人の面影だ。ある種、そこにいるのはカルデアを代表する人員とも言える。

「藤丸立香！ 君はマスターとしての自覚はあるのかね!! ここは人類最期の砦なのだぞ！ ならば5分前行動は基本だろう！」

「まあまあ、ムジークくん。落ち着いて落ち着いて。やあやあ立香くん、お疲れ様。話があるって聞いたけれどはて、どうしたのかな？」  
「とはいえマスターが私達に相談してきている時点で、特異点絡み。もしくはサーヴァントからの干渉、といった所までは間違い無いだろう」

「先輩！ お疲れ様です！ 今度は一体どの様な夢を見られたんですか？」

尊大にして小心者。されど魔術師らしくない程に『人』らしい現カルデアのリーダー。なお彼が作る料理は非常に美味しい。昨日のスパゲッティも美味しかったです。

ローカルデア新所長。ゴドルフ・ムジーク

その姿はかつてのものとは遥かに小さい。されどその頭脳は変わらず一級品。カルデアにある発明品の数々も彼女によってもたらされている。

ローサーヴァント、ライダー。レオナルド・ダ・ヴィンチ（リリイ）

そんなダ・ヴィンチとは逆のアプローチによりカルデアに助力するもう一人の頭脳。そんな彼の瞳と思考により乗り換えられた窮地の

数はあまりにも多く、数え切れない。

ーサーヴァント、ルーラー。シャーロック・ホームズ  
かつてギヤラハドをその身に宿し戦った。今現在は黒鉄の鎧をその身に纏い戦場を掛けるその少女。藤丸立香最初にして最優のデミサーヴァント。そして立香にとつて最も愛しき人。

ーデミサーヴァント、シールダー。マシユ・キリエライト  
あとシオンやネモ等も呼んだのだがどうやらまだ来ていないらしい。なおカルデアを代表する小動物、フォウくんもマシユの腕に抱えられている。ふおうと鳴き声を上げ、立香に右前足を上げた。挨拶のつもりだろうか、可愛らしいことこの上ない。

「ええい！　そもそも何故会議だと言うのにガラクタ部屋で開いている!?!　しかも何故小動物がいる!?!　しかも残り二人も遅れているぞ!?!」

「失礼だねー、ムジークくん！　私の発明品達は決してガラクタなんかじゃ無いぜ！　現にカルデアの機器類は私の子達が殆どだよ?」

「所長！　お二人に関しては私、マシユ・キリエライトから弁明を！」  
「何だね、マシユ・キリエライト！　発言を許可する!」

「無視したね…ムジークくん」

「はい！　お二人共エリザベート・バートリーさんとネロさんのリサイタルを通りすぎり聞かれ、お眠りになったそうです!」

「…あー!」

「二人とも独特だけドクセになるよね」

「はい！　私もそう思います、先輩!」

「…そう言うのは貴様らだけだと思っぞ?」

立香とマシユはもうダメだ、そんな大人組の憐憫の視線が二人を突き刺す。この二人は度重なるレイシフトと非日常との遭遇のせいで感覚が一般的なものから乖離している節がある。特に立香はその順応能力も合わせて非凡なサーヴァント達の奇行に慣れ過ぎている。懐が深いと言うべきか、それとも既にイカれているだけなのか…。

兎も角もカルデアのメンバーにとつては平和な日常だった。たとえそれが次の異聞帯攻略までの時間だったとしても。それでも間違

いなく平和だった。

——素に銀と鉄。 礎に石と契約の大公

「……「——は？」……」

しかし突如とそれは終わりを告げた。鈴の音の如き声が空間を支配する。ただただ五人はその声に冷や汗を流す。

——手向ける色は、“白”

「な、なんだね、この詠唱は!?! ダ・ヴィンチ! ホームズ!?!」

ゴドルフ・ムジークが露骨に慌て始める。同時にこの状況を即座に理解し得るサーヴァント二騎へと尋ねる。しかし帰ってきたのは芳しく無い反応のみ。

——降り立つ風には壁を。 四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

「カルデアの外からの干渉!?! でもその程度なら警報が鳴る! それに防衛設備だってある! なんでそれらが揃いも揃って反応しないんだ!?!」

ダ・ヴィンチは不思議がる。カルデアの設備は外からの魔力干渉などを受けると緊急警報を全域に鳴らす。同時にその干渉レベルにより対魔術用の機能を発動させる。ダ・ヴィンチが自ら編み込んだそれらの設備が未だに起動しない事はあまりにもおかしい。

——閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ

——繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する

「カルデアの設備が反応するのは主に外部から内部へと干渉する魔法。中からの魔力干渉は危険性が無いと見做されればアンチマジックは発動しない。しかしそれならば何故、そして如何にして内部からの干渉を行った? 少なくともこの時点でマスターへの悪意は見えない。ならば——」

ホームズは思考する。ダ・ヴィンチが叫んだ違和感。それらを判断材料にして魔術の発動者やその心理を掴もうとする。

——告げる

瞬間、床が魔法陣により白く染まる。まるでその光は夜明けの如く、淡く輝かしい。立香にはそれはホームズ、ダ・ヴィンチ、そしてマッシュを中心として輝いている様に見えた。

――汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に

――聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

「マッシュ!!」

ホームズの推理の一部を聞いた限り、この魔術自体に攻撃の意思はないらしい。そもそもこの魔術は立香にとって一位二位を争う程に馴染んだ魔術だ。だからこそ何処かへと飛ばされる可能性のあるマッシュへとその手を伸ばさず。

――誓いを此処に

――我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者

「先輩!!」「フオー!!」

彼女もまた立香へと手を伸ばさず。彼女にとってのマスターは立香ただ一人なのだ、その手が雄弁に語っている。

――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

そして光が部屋に満ち満ちるその時、二人は手を結ぶ。

硬く結ばれた二人の掌。その感触を感じるまま、全ては世界から掻き消える。

数秒後、中央管制室にあるカルデアスに異変が起きる。それは日本、そしてカルデアに作り上げられた大きな黒い穴。それは特異点では無い。ましてや新たな異聞帯でも無い。本当にただの穴だ。

そして同時に霊子演算装置・トリスメギストスは演算を開始する。それはトリスメギストスにとっては全く新しい演算。従来のモノとは異なるソレ。

急に演算を開始したトリスメギストスに混乱するスタッフやサーヴァント。しかしそんな彼らを他所にトリスメギストスはただただ告げる。

『……アンサモンプログラム、フォースドスタート。霊子変換……失敗。……演算、不可能。……データ、不十分。エクストラワールドオーダー、実証を、開始、を、強制します』

——序章 偽神栄光世界・トータス

副題 〈邂逅〉

攻略難易度 E

## 第零節②、オーブニング of トータス

場面は移り変わって、異世界トータス。「ハイヒリ王国」の中でも一番の蔵書量を誇る王立図書館に一人の少年の陰があった。

彼は本を読んでいる。その内容は『北大陸魔物図鑑』という題名だけで内容が分かかってしまう面白みのない物。だが彼の脇にはそういった本が幾つもの塔を築き上げていた。

少年の名前は南雲<sup>なぐも</sup> ハジメ。つい先日地球からトータスに召喚されてしまった者の一人だ。ここだけ見ればよくある異世界無双物のテンプレートだし、クラスメイトの殆どはチートだった。しかし唯一並みのステータス、天職は【錬成師】とあまりにも平々凡々な彼は【無能】と虐げられている。他のクラスメイトがこの国の団長、メルドを驚かせた中、ハジメに対してだけ微妙な顔で慰められたのは正直に言って恥ずかしかつた。

二週間に及ぶ訓練を経験したが、伸びは芳しくない。その伸びなさ具合と言えば：下の通りである。

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：2

天職：錬成師

筋力：12

体力：12

耐性：12

敏捷：12

魔力：12

魔耐：12

技能：錬成、言語理解

|||||

一応、比較すると通常の人族の限界が100から200、天職持ちで300から400、魔人族や亜人族は種族特性から一部のステータ

スで300から600辺りが限度である。こうして比較するとこと尚更ハジメのステータスの低さが伺える。ハジメは最悪そこにいる子供にすら負けるのだ。最初の頃の『異世界召喚ですか？ まじですか？』といった希望など水泡の如く潰れ去った。

そうして本当に訓練をしていても結局の所、戦力外ということを経験したハジメは訓練を最低限行い、代わりに知識と彼唯一の武器である『錬成』の腕を磨いている。

そういった経緯でハジメは図書館に来ていたわけだが、他にも理由が無い訳では無い。まずこの王国の人々の目がハジメに対して攻めるように酷いことだ。あまり人の悪意などは気にしないハジメだが王城の人々は誰しもがハジメにそういった眼を向けるのだ。流石のハジメにも四六時中そんな目を向けられるのはキツイものがある。

またハジメはクラスメイトにも味方がまあいらない。その一つの理由としてハジメが重度のオタクであることもあるだろう。事実、ハジメは『趣味の合間に人生』という人生の格言を掲げている。その言葉に従うかのように登校は遅刻ギリギリ！ 過ごす時間の大半が居眠り！ 昼飯は10秒チャージ！ そして最後のチャイムと共に即時帰宅！ といった青春という青春の全てを丸めて捨てたかの様なライフワークを営んでいた。

実際問題、かなりの変人である事は否めない。しかしそれと同時にハジメは別に他者に迷惑を掛けるような真似はしていない。

例えばハジメの身嗜みは一般的なもので不衛生ではない。またテストもいつも平均点は取っているため、先生の頭を悩ませることもないだろう。しかも話掛けられればオタク語以外の話題でも十分に話せ、むしろ聞き上手。将来の進路もかなりトリッキーだが、高校生にしては明確に計画されている。班活動や行事も己の役割をしっかりと果たせる。

こうして要素を上げると今の所はあまり批判されるような人間ではないことが分かる。にも関わらずハジメに対する当たりが必要以上に酷い。ならば何が理由なのか。

その理由は今にもハジメに駆け寄って来た。

「南雲くん、南雲くん。この本とかどうかな？ 『見習い騎空士でも分かる！ 四天武器武器上限解放チャート』だって！ 【錬成師】のお勉強にどうかな？ かな？」

「白崎さん、それはあかん。色々あかん」

少女の持つて来た色々アウトな本にハジメは思わず関西弁で止めにかかる。そもそもそんなのがこちらの世界にあるわけないのだが、そこを考え出したら深淵を覗くような気がするので目を背けることにした。

それは兎も角、今日の前でニコニコと眩しい笑顔を見せる少女こそが同級生の不興を買う理由そのもの、名を白崎しらさぎ香織かおり。学校では【二大女神】の一柱とまで言われる程に優れた容姿と人気を持つ。腰まで届く長く艶やかな黒髪、少し垂れ気味の大きな瞳はひどく優しげだ。スツと通った鼻梁に小ぶりの鼻、そして薄い桜色の唇が完璧な配置で並んでいる。

そんなスクールカーストのトップグループに君臨する香織はあろうことか、スクールカースト等知ったことか！と言わんばりにオタク道を突き進むハジメに何かと構うのだ。毎朝香織から挨拶をしてくる程度ならばまだいい。しかしハジメ10秒チャージの弁当を見て弁当の具を分けて来たり、行事の打ち上げにやたらと誘ったり：明らかに普通のそれとは違う感がある。

ハジメはそれらを香織の優しさから来るものと認識している。オタク特有の『勘違いしたくない』とか言う心理によるものである。

ただまあ、客観的に見れば「そうはならんやろがい」となるのは当然の起結である。男なら嫉妬を、女なら『白崎さんが色々してるのになんとも思わないの!?!』と軽蔑やらを含んだ視線を叩きつけてくる。正しく負の感情満席コースを食らっているのだ。

特に酷いのは檜山ひやまを中心とする小悪党四人組である。彼らは他の連中と違い、嫉妬と悪意をそのまま暴力や罵詈雑言として表現する。王城の隅で囲まれ、リンチされたこともまだ比較的最近だ。正直に言ってあまり会いたくない相手である。

そうした経験から地球の頃ならばハジメはオタク趣味絶対主義者

であった事から、負の感情のハーメルンの笛吹きである香織に少しばかり有難迷惑といった感情を持っていた。ただ最近は無能が故に擁護してくれる味方が居らず、ほぼ孤立状態のハジメ。そんな彼に味方をしてくれる彼女は間違いなくハジメの心を支えとなっていた。

その為、訓練が終わった彼女がわざわざここに来てくれてるのに少し甘えてしまっている。善意に過ぎないと思っではいるが、それでもにこやかな彼女にもう少し頼っていたいと思っってしまう自分がいる。

「そっかー、ごめんね南雲くん。ちよつとでも力になれたらっと思ってんだけど」

「いや、気持ちだけでも嬉しいよ。有難う、白崎さん」

「えへへ：それじゃあどういたしまして、かな？」

ハジメが今の正直な気持ちを礼として言うのと、香織は嬉しそうに照れながら微笑んで見せた。ほわほわと幸せそうなオーラが漂っており、他の者ならば一発KOだったろう。ちよつとハジメにもグツと来た。

とはいえ、ハジメは本来の目的も忘れてはいない。一週間後にはオルクス迷宮と呼ばれる魔物の巣窟へと向かうことになる。正直に言っただけ一般人レベルのステータスであるハジメを連れて行くような場所ではない。

ただ王国側もそれは理解しているようで、ハジメの強制参加は今回のみとするらしい。今回連れて行くのは神の命令だから、とのことだ。

だから今回集まる情報は主にダンジョンのモンスターや罠などを中心としたものだ。それらを予め知っておけばある程度、リスクは回避出来るだろうと考えた結果だ。何処まで役に立つかわからないため、とりあえず頭に詰められるだけ詰めておく。

そんな風に黙々と本の山を片して行くハジメとは対照的に、香織は魔力のコントロールの練習を行っている様だ。香織の場合は「治療士」であることから重要視されるのは魔法の技量。四つの魔力球を自分の周りで不規則に動かしながら、ハジメの様子を見守っている。

(まあ、有り難くはあるけど何というか…やけに僕のこと見てくるよなあ…)

そんな視線が何ともむず痒く、この先どれだけあっても慣れそうになかった。

~~~~~

日が暮れる頃、ハジメは図書館で幾つか資料を借りてから帰路に着いていた。香織はどうやら王族達との会食に誘われていた様で、ハジメより一足早めに帰ってしまった。

(まあ、クラスメイトの誰かに一緒に帰ってる所なんて見られたらもっと酷い目合うだろうけどさ)

ただまあ名残惜しいと思っている時点で、ハジメにとって香織は以前よりも大切な存在となっているのだろう。そこは自覚せざるを得なかった。

そんな己を少し新鮮に感じていると、ふと気がつく。

——人がいない

確かに今の時刻は夕方。人通りも少なくなり始めるのは自明の理だ。だが所詮は少なくなるだけであり、このように人陰すら見られないうというのはあまりにもおかしい。第一ここは城下町の大通り。この状況は違和感でしかなかった。

それに気がついた途端、今度は肌を舐めるかの様な怖気が首筋に触れた。全身が強ばり、鳥肌がぶつぶつと泡立つ。

ハジメは脳裏に響く警鐘に従い、その場から走り出した。

すると先程まで自分がいた場所が急に砕けた。派手な音を立てて、クレーターを作り上げる。

何かが己を狙っている。それだけは分かったが何者か等確認している暇もない。何がなんだか分からないが、クレーターを創るような一撃を喰らえば死ぬのは間違いない。ハジメは闇雲に走る。

すると続けて鳴り響く破壊の音。どれもハジメには擦りもししていないが、段々と近づいて来ている。近い将来、ハジメを撃ち抜くのは目に見えていた。

そして曲がり角に入る時、ハジメは己を攻撃する者の正体を僅かな

がらも視認した。

（——本?!）

奇妙な事にその正体はハジメを追いながら飛来する一冊の本。それが魔力光を帯びた弾丸を練り上げ、ハジメへと打ち出していた。

「異世界つてのは！ 無機物すら僕よりも強いのかっ!!」

軽くシヨックを受けたのは否めないが、兎も角ハジメは走った。己が弱いのはもはや重々承知であるため、そこまでシヨックが少なかつたと言うのもある。

そしてやはりどれだけ走っても人影が見えない。家に灯る光はあるが、どれも鍵は閉められ、ハジメの言葉は聞こえていないらしい。まるで魔法か何かで自分だけ隔離されたような気分だ。

弾丸もいよいよ擦り始め、直撃はそう遠い話では無い。掠れた箇所から血が滲み出すが、歯を食いしばりながらも走る。

そしてハジメは息を切らしながらも更に角を曲がり…停止した。

（行き止まりっ!!）

血の気が引いたのがしつかりと分かった。しかも壁は木製で「錬成」での貫通も不可能だ。退路がいよいよ無くなり、敵の攻撃の精度は今こそ最高潮。詰みの二文字がハジメの脳裏に浮かんだ。

どうにかしようと思いを巡らせるが、遅い。先ほど来た角の方から魔力弾の準備を終えた本が現れた。

せめて直撃は避けようと立ち止まるその場所から僅かにでも離れようとしたが、運が悪い。床のぬかるみに足を取られ、転んでしまう。

（まずっ——）

そして焦る余裕すら無く、ハジメの眼を魔力光が埋め尽くし——

「ッガンドッ!!」

そして今にもハジメに放たんとした本、スペルブックを黒色の魔力弾が貫いた。

動力の核を潰された事により機能を停止させ、床へと落ちるスペルブックの残骸。あまりの急展開について行けぬまま唾然とその場に

座り込むハジメ。

(助、かった?)

何が何やら分からないが、つい先程まで敵だった本がもう動かないことに安心するハジメ。その一方で角の向こうにいるであろう乱入者に身構えた。

するとこちらが見えていないにも関わらず、乱入者はハジメの張り詰めた雰囲気を感じたのか優しげな声で話しかけてくる。

「違う違う! 俺は敵じゃ無いよ。君が襲われてるのに気づいて助けただけだよ。どうか信頼して欲しい」

その言葉にハジメは今までは別の理由で身構えた。それは彼が話す言語が己の地元のそれ、日本語であったからだ。聞き覚えが無い声である事から、クラスメイトでないことも把握できた。

しかし不思議と安心させられる様な声色だ。緊張していた体も思わず緩んだ。

「…あつ! そういえばここ何処の特異点だ!? 見た感じ西洋の文化圏ぽいけど…じゃあ英語なら通じるか? どう思う? マシユ?」

「そうですね。見たところ旧イギリス圏で見られる街並みに近いかと。試してみますね! ヘーイ! アーユーファイン?」

「フォウフォウフォウ?」

すると声の主がブツブツと日本語でそんな事を呟きながら近づいてくる。そしてどうやら連れがいた様でハジメに英語で話しかけてくる。何故だか知らないが外国人と勘違いされているらしい。あと何故か奇妙な鳴き声が聞こえるのも気になる。

一応「言語理解」があるため、英語でも話せはするが、そもそも異世界で日本語を話せる人物ともなれば逃せない。慌ててハジメは日本語で返事をする。

「すみません! 僕日本人です!」

「おおー、そっかそっかー。色んな言語覚えてるけどやっぱ日本語の方が馴染みが…うん? じゃあここ何処だ?」

いよいよ声の主が角の向こう側から現れる。同時に月明かりがこの道薄らと照らした。

男の方はイケメンというわけではないが顔は整っていた。黒髪で中肉中背と何処か平凡な印象が拭えない。しかしそれと同時に彼が発する穏やかな雰囲気は不思議と信頼できると人物だと感じさせられた。

一方、彼の傍らの少女は薄紫色の髪で片目を軽く隠し、眼鏡を掛けているという中々珍しいファッションをしている。しかし同時に滅多に見ないほどに優れた容姿を持つ美少女であった。それこそ香織や雫といった【二大女神】と競い合える程のものだ。ただタイプは二人とはことなり、保護欲を擲る様な雰囲気をしていた。

そしてそんな彼女が両腕に抱えているのはモコモコとした印象の小動物。パツと見た感じ小型犬に見えなくも無いが、従来の動物とはまあ当てはまらない。そもそもフオウって鳴いてる時点で——「マーリンシスベシフオウ！」：なんか喋った？

兎も角そんな二人と一匹(?)が角から姿を現した。彼らは地面に倒れたままにいるハジメを見下ろしながら、すまなさそうに話しかけて来た。

「俺は日本出身カルデア所属、藤丸立香。早速でゴメンだけど、ここが何処か分かる？」

「えーつと…僕は南雲ハジメです。それでここは…トータスのハイリヒ王国です」

僅かな月明かりが二人の姿を映し出す中、声の主こと藤丸立香はハジメにも分かるほどにあからさまに目を丸くした。

「…トータス？」

「は、はい。そもそもここは地球じゃないんですけど…大丈夫ですか？」

立香はハジメの返事を聞くと、頭を抱え込んだ。隣の少女は何やら「そう言えば先輩、夢を見ていたとおっしゃられていましたね。もしかして…」とキラキラとした目を立香に向けている。小動物もまた「マーリンシスベシフオウ！」と元気だ。

やがて少年は覆っていた掌を顔から下げると、俯き消沈しながらポツリと呟いた。

「また、異常事態かー…」

「やはり先輩の夢は何かしらの事件の前兆ですね！」

「えーっと…本当に大丈夫ですか？」

「フオウフオウ！」

三日月が人々を見下ろす中、何とも言い難いカオスがこの裏路地に発生していた。

ーこれが後に世界をも救う英雄二人の邂逅、とは少なくとも世界の誰もが予想し得ないことであった。

## 第一節、異なるモノ

「マスター、どうやら王国にいる。『白』の陣営のサーヴァントは二人。見たところ『セイバー』と『シールド』…かな？ 暫定『シールド』に関しては別クラスの可能性も否めないね。いずれにせよ断定は難しい。それでマスター、君はどうする？」

『…ハハッ。わざわざ来たか…カルデア』

そこは太陽の届かぬ闇の底。光源は緑の鉱石が放つぼやけた光と地面にて輝くソレのみ。その程度の光では、この溟い空間の全体的な輪郭さえ浮き出す事が出来ない。

そんな空間で一人佇む者がいた。不思議な人物だ。体のおおよそを衣で覆い、その顔すらもフードで全容が見えない。闇の中でなお浮かび上がる様な存在感と同時に、夢幻の様な曖昧さがあった。

その人物は、『キャスター』は虚空に向けて話しかけている。一般人が見ればその者の頭を疑うだろう。しかし『キャスター』は文字通り魔術師。『念話』により遠くにいる誰かと話していた。

『それならばマスターは十中八九あの男だが…。そうになると『セイバー』が何者か気になるな。真名は何か分かるか、『キャスター』？』『うーむ、無理だねえ。そもそもそう言った事はルーラークラスが最適解さ。その上私はこーんな所から『千里眼』で覗いていると来た。次元すら違うんだ。むしろそちらの状況を見れるだけマシなほうだろうね。地上に出られるならば細かいことが分かるかも知れないが…許可はしてくれないだろうか、マスター？』

『…嗚呼、不許可だ』

「それは残念。ただ『セイバー』に関してはそこまで懸念せずとも良いと思うがね、私は」

『…たかが霊長類の上澄みと言えど、仮にも『セイバー』。最優のクラスだ。それだけでも名を知る程度の必要性は有ると思うが？』

「そうは言うが霊基の等級がまあ、兎に角ヒドイよ。あれなら一定以上の使い魔の方がまだマシさ」

『貴様らも使い魔でしか無いが…それにしてもその程度か。戦闘によ

る功績を残したサーヴァントではない、と見るべきか？」

「そこまでは私も分からないさ。…ああ、それと」

『ふむ？ なんだ？』

一拍『キャスター』は間を開ける。その際ふと目に映ったのは『キャスター』の横にある黄金の杯。そしてそれを中心として輝くソレ、巨大な魔法陣。

恐らくはあと六箇所でも同じく刻まれているであろうそれを見つめて、虚空へとその言葉を告げた。

「準備は済んだよ、マスター」

『……ふ、フハハハハハハハ!! 宜しい！ 既にこの世界の『神』は承諾した！ 忌々しい貴様も、奴も須らく塵殺だ…さあ——』

「念話」越しても分かる。あまりにも、次元を超えてもなおお途絶える事のない程の深い執念。それをありつたけ言の葉に載せて、『マスター』は告げた。

『——再び私は、全ての上に返り咲くのだ!!』

——そして杯は願いに応えた。

——この黄金の光が意味を成す日は、もう間もなく。

~~~~~

——どうしてこうなった。

南雲ハジメはとてつも無い後悔に駆られていた。

図書館にいた時以上に湧き出てくる己自身への呆れ。右手で顔を覆いながら、ベッドに腰を掛けた。

そして、床に座り込む二人と謎の生物をじっと見つめた。

「ごめんね、南雲くん。厚かましい真似して…」

「マシユ・キリエライト！ 心から感謝致します、南雲さん！」

「フォウウ！ フォウフォウ！ お邪魔してすみません 的な」

そこには何処から取り出したのだろうか。布団一式を床に敷き、今にも睡眠を取ろうとしていた。ちなみに言っておくとハジメの部屋は他の使徒に比べ一層狭い。そのため立香と少女はかなり密着して寝ることが求められるのだが…二人に全く恥じらう様子は無い。

もしかしたら付き合っているのかも…と野次馬的な事を考えるハ

ジメ。しかしそれ以上に無断で恩人とは言えよく知らぬ他人を王城に招き入れる真似をしてしまった己に再び頭を抱えた。

「本当に…どうしてこうなったんだろう…」

思い出すのは立香との遭遇直後の事。今の己と同様、立香が頭を抱えていた時の事だ。

立香が頭を覆った後、取り敢えずハジメはこの世界の事、自分達がどんな風にこつち来たのか、そしてここが本当に異世界であることを彼等に話した。

その結果、立香等は一時ハジメから距離を取って円陣を組んだ。

「…案の定、カルデアとは通信が繋がらないな」

「南雲さんの扱う『錬成』という『魔法』も我々の『魔術』とは異なるプロセスで発動されています。今までの『特異点』や『異聞帯』とは別物で考えた方が宜しいかと」

『冥界』、『あの世』、『ユニバース』、『エリザ世界』、『ぐだぐだ』…色んな世界は見てきたなあ。そして…ついに異世界と来たか」

「もうじきコンプリートですね！ やりましたね、先輩！」

「フオフオウ？それは本当に喜ぶべき事か？ 的な」

そして始まる作戦会議(?)。なんだかその割には呑気な感じが否めないが、真面目なのは一同伝わってくる。

ただ少年らの口から『冥界』とか『あの世』とか色々浮世離れた言葉が聞こえて来るが…その辺りは現状己らも異世界にいる身。何とも言えない。

不思議なのは異世界という非日常に巻き込まれた割には平静である事だろう。同年代に見えるが、この落ち着き方はそうとは思えない。見た目よりも二、三歳上なのか、と少し疑って彼等を見つめる。やがて彼等の中で意見が纏まったのか、円陣が割れてハジメの方を向いた。

「えーつとまず情報提供ありがとう、南雲くん。お陰で自分たちの状況がよーく分かった。俺たちだけじゃこれだけ早く現状を把握でき

なかっただろうし、本当に助かったよ」

「いえ。微力でも力になれたなら嬉しいです」

「まず確認するね。この世界は異世界、色んな種族がいる。それで人間は他種族達とは宗教的な問題とかで合わないから戦争してる。でも最近魔人族が強くなりました、ピンチです。だから開幕チートな君達を神様が呼び、君達を戦力として鍛えようとしてる。なお君達にはがある手段がない物とする。ならばせめてと一寸の望みである、魔王討伐からの地球帰還を目指してる。ここまではあってる？」

「か、かなりざつくりですけど…合ってます」

立香は出会って間もないにも関わらず、その言葉からはまるで距離を感じさせない。そして不思議とハジメに不快感を感じさせない。正しくコミュニケーションのお化けだった。あつという間にハジメとの距離感を把握してしまっていた。

そしてハジメが肯定すると、立香はすぐに言葉を返した。

「なら俺たちは君達の味方だ。まず俺たちはさっき言った様に地球出身、『人理継続保証機関 カルデア』に所属する…言わば魔術師だ」

「ま、魔術師？ でも地球にそんなファンタジーがあるわけ——」

「うん、俺も前まではそう思ってたよ。すつごく分かる。でも…残念ながらあるんだよね」

そして「『ガンド』」と一言告げて、空に指を向けた。すると詠唱が無いにも関わらず立香の服に筋が灯ったかと思うと、その指先からは何かが放たれた。

「こんな風にこつち側の『魔法』とはちよつと違うプロセスの力を用いてるんだよね。見た感じこつちじゃ無詠唱って無いでしょ？ …ま

あ、俺のコレは俺自身の力じゃ無いんだけどね」

「えっ？ ええ…もしかして藤丸さんって凄い魔法の使い手なんですか？」

「いやいや、俺自身は雑魚だよ。今の力も『霊装』っていうこの服が凄いただけだよ。ただ…隣のマシユは強いよ」

「お褒め頂きありがとうございます、先輩。ただ今の私には『オルテナウス』が御座いませので、あまり力になれるかは分かりませんが…」

見たところマシユと呼ばれた少女は細身の少女だ。筋肉がついている様子もなく、服装も制服染みた一見何の変哲も無い服装。とても強い風には見えない。

ただこっちの世界では見た目と強さはあまり比例していない事が多い。そこ等を歩き回る子供さえハジメより強い事がザラなのだ。ここに来る前のハジメならば嘘だと思っただろうが、今のハジメには「ああ、この子も見た目詐欺か…」と悟った風に頷く。

「俺たちの任務は地球の『人理』、要は人類が繁栄するために必要な要因、これを守る事。一般人を巻き込んだかなりの規模の異世界召喚を見逃す訳には行かないさ。だから君達を地球に送り届けるまでは味方、って考えて貰えたら有難いな」

『人理』と言う言葉が主に魔術世界で使われている言葉であるため、あまり立香の話をよく飲み込めないハジメ。ただ立香が最後に放った言葉には明確な反応を示した。

「帰る方法は、あるんですか？」

「いや、流石に異世界召喚なんて初めてだし全然分からないな。これからその手段を探っていくって所かなあ」

「そう…ですよね。すみません」

「いいや、不安な状況だから仕方ないよ。こっちこそ変に期待させてごめんね」

「いえ、この世界で僕ら以外に地球出身の味方がいるのは心強いですし、それ以上は望みすぎですから…」

帰る方法が分からなかったのは残念だが、同時に『帰還』という手段に対して肯定的な味方が増えたのは非常に喜ばしい。

王国側は味方ではあるが、あくまでもその理由は『使徒』という強さ故。『帰還』に対しては強い否定の意思を見せている。そう言った面では完全な味方とは言い難い。

「まあ兎も角、南雲くんは早く城に帰るといいよ。スペルブックに狙われてたのも何かしらの理由があるんだろうし…道の途中までは俺たちが送って行くからさ」

「藤丸さんはそれからどうするんですか？」

「まー流石に城の中に入る訳には行かないしね。城下町の適当な宿屋に入つて——あ」

立香がこれからの事に思考を巡らせていると、ふと何かに気づき固まった。

「あ？」

「…こつちの世界つて貨幣制度あるよね？」

「…もしかしてお金持つてないんですか？」

「うん…俺たちも異世界召喚的なアレでこつちに急に来たから…」

「すみませんが僕もお金持つてないですね…あつたら差し上げたかつたんですけど」

「いや、これは仕方ない。取り敢えずこの城下町を一旦出て野宿でもするさ。慣れてるから大丈夫大丈夫」

「見たところ温帯に近い気候の様ですから、何の問題もありませんね！」

物々交換が成り立つんだつたら何かしらの方法はあるんだけどなあ、とボヤク立香。そんな彼等を横に見ながら、ふとハジメは気づく。

そして横にいる彼等にある物の有無を尋ねた。

「…そう言えば『ステータスプレート』持つてます？」

「……………すてーたすぷれーと？」

「フオウ？何ソレ？ 的な」

ステータスプレート。それは過去に生み出された量産型のアーティファクト。アーティファクトという物自体が珍しいこの世界において最も流通しているアーティファクトとも言える。

ステータスプレートに血を認識させる事でその人間専用のアーティファクトとなり、その個人の情報が登録される様になる。その機能と多産性から地球で言う身分証代わりとなっており、これが無ければ不自由する事が多数存在する。

例えば住民登録や冒険者登録、人権保障、就職活動、結婚…様々な事に差し支えが発生する。

——そう、例えば出入国など。

と、いう説明をした所立香は口を咄然と開けた。

「…つまりそれが無いとこの国を出る所か、まともに生活すらままならないって事？」

「何もかも出来ないって訳ではないですけど、その分出来ないことは増えますね」

「…ステータスプレートってどこで手に入る？」

「一応冒険者ギルドとか、市役所で発行してもらえららしいですけど…その際何かしらの身分証明が必要ですから…」

「…あー、うん。無理だね！」

「そうですね」

立香達は当然ながらつい先ほどまではこの世に居なかつた存在である。ハジメ達の場合は王国や教会がその存在を保護した事により、この世界で身分を獲得した。しかし立香達は恐らくこの世界にとつてもイレギュラーな者。その様なもの、示せるはずが無い。

こうなつては王都の裏路地で潜む、というのも危うい選択肢だ。見回りに気づかれでもすれば警察署に連行は間違いない。

これからの行動に支障が出ては困る為、何かしら方法を考える立香達。頭をうんうんと唸らせている。ハジメも助けられた恩返しに何か方法はないかと思考を巡らせて――

「で、こうなつたんだよね…」

その結果、ハジメの部屋に二人と一匹を匿う事となつたのだ。なお城に潜入する際、二人はよく分からない古びた布を羽織つていた。それが何かと聞くと「顔の無い王」の余つた布で出来た礼装ポンチョだよ」との事。なんとそれを羽織れば人の認識から外れて行動が行えるらしい。

それで外に出ればいいんじゃないかとも思つたが、二人はどうやら暫くは王都で情報収集を中心としたい様だ。またポンチョ自体それほど乱発出来る物ではないらしい。

ここならば自然と情報が集まる上、『使徒』の状況も確認出来る。『顔の無い王』が無くとも隠密行動はこなせるらしく、その心配は要

らないとの事。

その為立香達情報収集の間ハジメの部屋を借り、拠点とする事となったのだ。

これだけならば一見、ハジメのみが負担を負っている様に見えるが見返りも十分ある。まずは先程も言ったようにハジメ達の帰還への助力の確定。部屋を貸す事となった際、立香はそれを確約した。

そしてもう一つ、ハジメには見返りが存在する。それは――

「地脈の確認は済んだから、明日そこでサーヴァントを一騎召喚する。そのサーヴァントに『指導』の件はお願いするね。南雲くんはそれで大丈夫？」

「はい、『魔術』を教えて貰えるだけ有難いですし」

そう、地球由来の『魔術』の指導である。

魔術師のそれ程立派なものでは無いが、一般人にも『魔術』を使うための要である『魔術回路』は存在する。もしかしたら使えるようになるかもしれないと、交換条件として立香が提案したのだ。

迷宮突入まで残り二週間。習得できる可能性は低いものの、戦闘能力ゼロのハジメが掛ける理由にはなる。立香が引き出した提案にハジメが飛びつくのは仕方のない話であった。

ただどうやら立香は『魔術』をそこまで得意としていないらしい。そのため指導する人間は翌日呼ぶそうだ。もしかしたら指導する気がなく、誤魔化されているだけかもしれないが、相手は命の恩人。その指導とやらが有れば運がいい方とハジメは割り切っている。

兎も角、明日からは今までよりも忙しくなりそうだ。そうハジメは一抹の不安と隠せない興奮を抱くのであった。

~~~~~

——おかし

立香はハジメの話に疑念を抱いていた。

隣ではフォウくんを挟むようにして、マシユと共に寝ている。年頃の男女ならば緊張もするだろうが、生憎ながら二人は当にそんな段階を超えている。故にマシユは立香のことを信頼し切っているようですやすやと穏やかに寝ていた。

時刻は恐らく深夜だろう。窓から覗く月が高く、街を見下ろしている。城下町からの喧騒や明かりは無い。東京などならば時刻など関係ないとばかりに電灯が輝き、大人達が夜の街に繰り出すものだろう。そう言ったことを考えると、やはりこの世界はかつての地球とは違うのだと思わされる。

そう、かつてのだ。

辻褄が合っていないのだ、立香の現状とハジメの話は。

立香はここに飛ばされるまで異聞帯やクリプターとの戦いを繰り広げて来た。そしてその戦っている理由は他でもない、凡人類史を取り戻すためだ。

異星の神達により地球上からは大半の人間がその攻撃に抗えず消えた。だからこそ彷徨海を拠点とするカルデアの人員以外や異聞帯の者達以外地球に人が存在するはずが無いのだ。

しかしハジメは言いかけていた。地球にそんなファンタジーがあるわけがないと。

異星の神々の攻撃は甚大で強力だ。地球の表面を跡形も無く消し去ったそれはファンタジー以外の何物でもないだろう。

だからこそハジメの言葉は明らかに今の地球のそれとは矛盾している。立香は大して賢くないその頭を回し、考える。

(南雲くんの話を聞くからに恐らく俺が最後にいた地球と南雲くんが居た地球の年代はそれ程ズレていない。そう考えるとこつちに来るのに大きなタイムラグがあった訳じゃない。なら考えられる可能性は特異点か異聞帯から南雲くんが来たという選択肢。ただ日本にはつい最近までリンボの特異点があった。もしもう一つ特異点やらがあったならスタップが気づくはず。更に言えば話している内容にそれ程ズレが見れなかった。ならその説も違うのか？ 一体何が原因で――)

そこまで立香は考えたが、答えらしきものは見つからない。ただ明確に言えるのはついそこで寝ている少年達は紛れもなくイレギュラーな存在であると言う事。

それだけは念頭に置いておこう。立香は僅かな疑心を抱えながら

も明日からの任務に備える為、眠りにつくのだった。